

08の講義内容

『古今和歌集』の注釈書『古今集註』

—京都大学附属図書館蔵『古今集註』にまなぶ—

萩原 義雄

はじめに

延喜五年(九〇五)に成った本邦初の勅撰和歌集、この歌集の編者そしてこの企てを目論んだ人のことを後の注釈書はどのように伝えているかをここで考えてみよう。鎌倉時代の歌学の家を中心にこの勅撰和歌集の研究が推進されてきた。こうした『古今和歌集』の注釈書類の写本は、凡そ数百種に及んでいる。このなかで、今回は京都大学図書館所蔵の『古今集註』についてここで考察していくことにする。

書誌について

この資料は、表紙題箋に「古今和歌集上」「古今和歌集下」とあつて、上下二冊の粘葉装にて改装・菱垣地車文利休茶色裂表紙、金箔型押紙見返、本文料紙・斐紙で、一六・五×一三・〇 押界(界高一四・二)八行の写本で、冒頭に「古今和歌集者延喜聖代詔四人哥仙被撰之所謂大内記紀友則御書所領紀貫之前甲斐少目九河内躬恒右衛門府生壬生忠岑是也。其内貫之専奉之仍貫之自筆集アリ。故合二本ナリ。ミカト后宮ニタテマツル二本ナリ。イエニト、ムル一本コレヲツタエテ輔仁親王モチタマエリケリ。ソノ、チ花蘭左大臣有仁コノ本ヲ讚岐

院御在位時タテマツリタマエリ。書寫之執筆教長ナリ。一両本有之故に今不忘失今遁世後不審之事等注置之故 人之在世不能無為思慮易遷哀樂相變感生於志詠形於言是以逸者其詞樂怨者其吟悲可以述懷可以發憤動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於和哥 コノウタアメツチノヒラケハシマリケルトキヨリイテキタリ。……」と記載され、奥書に、

「本云 本記云 治承元年九月十二日謁教長入道親受訓説訖／仁治二年卯月廿六日書寫訖」〔序文〕

「本云 本記云 治承元年九月十二日屈請教長入道叟鬱蒙事」〔卷二〕

「本云 本記云 治承元年九月十三日相遇教長入道沙汰了／仁治二年五月三日書寫畢」〔卷第六〕

「本云 本記云 治承元年九月十四日招教長入道決不審等事／仁治二年六月六日書寫畢」〔卷第十〕

「本云 本記云 治承元年九月廿三日相遇教長入道沙汰了／仁治二年七月廿三日於燈下亥尅許書寫了」

〔卷第十六〕

「此這紙安樂園御筆也。而不被事終歟。此本若自御室邊出歟。有所持之仁者尋之可書繼哉／和哥浦末葉
〔花押〕」
と書寫者の名前が最後に記載されている。

これに基づき整理するに、藤原教長撰、伝二條師忠筆の仁治二(一一二四)年の書写の欠本(巻十六、巻十七末から巻二十が欠巻)資料である。資料所蔵の[京都大学附属図書館のこの書の解題](#)には、

「十二世紀頃までの古注、十二〜十七世紀頃までの旧注、十八世紀〜十九世紀頃までの新注、それ以降の現代注と大別される。古注は主に仮名序に対する注で、旧注はさらに鎌倉半ばまでの前期、室町半ばまでの中期、江戸初期までの後期に分けられる。前期旧注には源俊頼撰『俊頼髓脳』、藤原清輔撰『奥儀抄』のような歌論書における注釈と、歌集の一部を取り上げて注を加えたものがあり、後者の中に本書、藤原教長の『古今集注』や頭昭の『古今集註』があげられる。

本書のことは顯昭の『古今集註』にも引かれ、その存在は知られていたが、長い間佚書となっていた。某華族の家に蔵されていたという本書はその後、横浜の閻魔庵岡本氏の書庫を経て本学の有に帰したものである。本書には随應による書写者・二条師忠との極めが添えられているが真偽はわからない。」

としてゐる。また、本文は片仮名と漢字を以て記載するのだが、卷第十五 [02b052](#) の「兵衛〔藤原隆経朝臣のむすめ〕の哥から [02b056](#)、[02b58](#) から [02b062](#) まで平仮名表記が用いられたりして、元は平仮名書きであったのをカタカナに直して書寫した可能性を窺わすような資料体裁でもある。

本文内容

さて、実際の本文内容についてみるに、卷第二、卷第十三、戀歌三と卷第十七などの一部分の箇所を見てみることにする。

卷第二

春哥下

077 雲林院ニテ桜ノ花ヲヨメル

承均法師

イサハクラワレモチリケン **イトサカリ** アリナル人ニウキメミエナム

コレハサクランノイトメテタクサカリナルツ井ニカクテモアラシ。ウキメモン人ニミユルヤクアシチリナントヨメリ盛者必滅乃理ヲヨメルナリ。

この歌の第三句に着目して見るに、ここでは「いとさかり」とあるが、これを「ひとさかり」とする古寫本との異同が既に指摘されている。

「いとさかり」…高野切・雅経本・家長(清輔)本・前田(清

輔)本・穂久邇文庫(清輔)本・天理(顯昭)本・伏見(顯昭)本等の六條家系統。

「ひとさかり」…私稿本・龜山切・基俊本・筋切本・元永本

・雅俗山庄本・嘉禄二年(時雨亭)本・貞応二年(時雨亭)本・永暦本・建久本・寂惠本等の俊成・定家の御子左家系統。

と云った二系統に大別されている。顯昭『古今註』(續々群書類從)に、「此歌在素性集、又普通本ニハ、**ヒトサカリトアリ**」と記載され、この普通は前田本・天理本に本文傍ら記載の「普通ハひとさかり」の書込みと共通することがらで、御子左家系統の証本を指示する注記であろう。御子左家の定家は、この点をどう言及してきたかであるが、定家自筆嘉禄二年(時雨亭)本や『僻案抄』(日本歌学大系)の「これをいとさかりと、い文字かきたがへたる本を見つけて、最と釋する説、不可用。物かきうつすとて、あらぬ僻文字どもかきける物の、ことやうの手なる草子を、貫之が自筆といひて、人すかしける物をもてなしいひいでたる、いたづら事也」と強く糾弾して「ひとさかり」を正統派に押し上げたのである。爾来、注釈類はこぞつて、

此歌イトサカリトヨム説有ト云リ。当流不用義也。一盛也。(『古今集延五記』)

いとさかりと貫之自筆の本に有と云。僻事也。ひとさかりを用也…。(『蓮心院殿古今集註』)

とこの箇所を記述し、歌学の主流である定家指示に靡いている。中世許多の注釈書類が書写され、詞書きや歌詞の異なりについては言及されるものの、写本間における文字の異同については是非を論じた資料を見ないことを今の研究者はどう見るのが今後の研究課題でもあろう。遠藤邦基氏(国語国文「古今和歌集古写本の異文」)は、この記述について詳細に検討分析され、その一つに転呼音による書き換え意識(轉呼音は原則的に表

記しないという規範的表記意識の影響で、表記面では「誤った回歸」が生じ、語頭・語中尾を問わずワ(ア)行の仮名をハ行で表記する傾向があった(こと)を提示された。

これと同様の仮名表記の異同の歌が同じく巻第二二に見えるので併せて検討されたい。

ヤマフキハアヤナ、サキソハナシント ウエケンキミカコヨビコナクニ

ウエラキシ人モコヌニヨシナシヤマフキサカテアリナン。トク子ルナリ。コヨヒトヨメルハコビノ心ナルヘシ。

卷第十三

戀歌二

ヤヨヒノツイタチニシノヒ二人モノワイヒテノチアメノソホフリケルニヨミテツカハシケル。

在原業平朝臣

616 ヲキモセ爪子モセテヨルソアカシテハ ハルノシノヒノナカメクラシツ

コト二人モノワイヒテノチアメノソホフリケルニヨミテツカハシケルトハヘルモノヲハコト、モトイフ。近代消息ノコトハナントニソ真名ニカキハルラムカシハカクカケコトハニモツカヘリ。イセモノカタリニコレノミナラ爪ヲホクハヘリ。マタ道風カランナノモトニツカハセルフミニイマユフサリマイリコン。クハシキコトヲハマノアタリニナソモトカキタリ。カクコハノシキコトヲカケルナリ。ウタニヲキモセ爪子モセテトヨメル。ヨルモコヒシサニヌルコトモナクマタヲキタリトモナクテアカシツトヨメリ。ナカアメハルフルモノナレハナカメクラシツトワカコヒニナカムトイフコトヲカケテヨメルナリ。

卷第十七

業平朝臣

871 ヲホハラヤヲシヲノ山モケフコソハ カミヨノコトモヲモヒシルラメ

二条ノ后藤氏「去平濁」ニテヲハシマ爪カ大原野ハ氏神ニテマイリタマヘレハ先祖ヲ、モヒテキタリタマヘルトソ神モヲホシメ爪ヲホムトヨメルナリ。

873 詞書 寛平御時ニウヘノサフラニヘリケルヲノコトモカメヲモタセテキサインノミヤノヲホンカタニヲホミキノヲロシキコエニタテマツレタリケレハ

ヲホミキトハサケワイフ。サイハラニモヲホミキマイレマエトシメトウタヘリ。マイラセヨトイフナリ。コレハ后宮ニハ造酒司日々酒ヲマイラ爪。ソノヲロシマウシニ殿上人カメヲサケイレムタメニタテマツリケルヲマハテトリイテ、蔵人トモワラヒケリトイヘリ。蔵人ハ女蔵人ナリ。ウチニモ八人ハヘリ。后宮ニモハヘル也。

881 イケニツキノミエハヘリケルヲヨメル 紀貫之

フタツナキモノトヲモヒシヲミナソコニ ヤマノハナラテイツルツキカナ

ヤマノハニツキハイツトヲモフニミツノソコヨリモイツルハフタツ月ノアルカトウタカヘルナリ。文章ノナラヒカクノコトシ。

883 タイシラ爪 ヨミ人シラ爪

アマカハクモノミヲキテハヤケレハ ヒカリト、メ爪ツキソナカル、

クモノミヲトハナカトイフナリ。カハノナカツモイフサレハ、ヤキニヨリテツキモト、マラ爪カタフキヌトナリ。

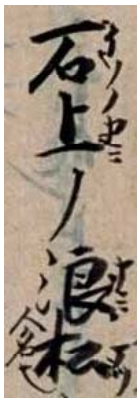
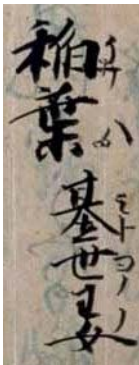
883 詞書 惟喬ノミコノ狩シ井ケルトモニマカリテヤトリニカヘリテヨヒトヨサケヲノミモノカタリヲシケルニトウカアマリヒトヒノツキトカケリ。

コレハ終夜酒ノミ語ヲシケル二十一日ノ月イリナントシケルトイヘリ。

884 詞書 タムラノミカトノ御時齋院ニハルリケルア世キラケキミノハ、アヤマリアリトテトカケリ。

田邑ハ文徳天皇ナリ。齋院明子内親王ヲハ、夫アリナトイヒテ改ムトシケルナリ。ソ乃コト僻事ニテトイフナリ。と云うものであつて、哥については哥の排列順に記述がされているが、あくまで、部分抄出する形式でこの注釈が行われていることに気づく。なかには、哥は掲載せずに詞書きだけを示し、これに注記するところも見えている。そして、漢字表記で示すことばは、ここでは極力避けていることも伺えてくるのである。漢字表記の文字のな

かには、そのアクセントを示す例が僅かながら存在する。「能有^{ヨシナリ}〔平上〕」2b041、「稻葉^{イナハ}〔入濁〕」2b055、「凶服^{ケツレフク}〔上入濁〕」2b060、「石上^{イソノカミ}〔去入〕」2b069、「藤氏^{フジノウヂ}〔去平濁〕」2b070。

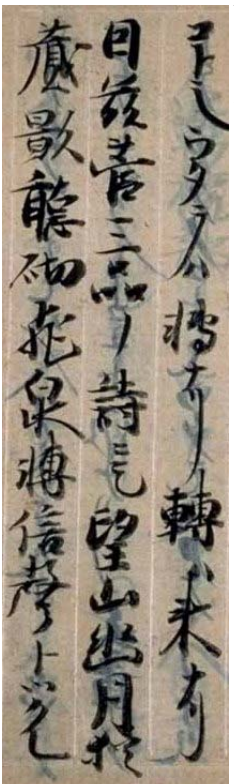


典拠書名と引用句一覧

序文

日本紀^記。毛詩017。奥義抄018。万葉集034。古今和歌集034。

卷第一



菅三品ノ詩「望山出月於蔵影聴砌飛泉轉信聲」054。
不空羅索一卷ノ経「利益ノ不思議ヲトク」056。
卷第一

万葉集062。拾遺抄064。

卷第十

万葉集110。

卷第十三

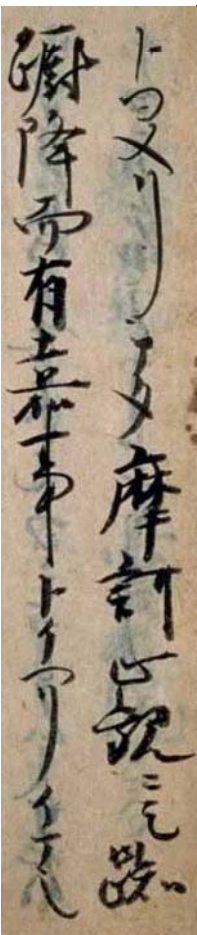


順力和名2b021。
○セウソコハ消息ナリ。コレヲハ順力和名ニユキカヘルトヨメルトナム。
『和名類聚抄』源順撰には、これに該当する卷第、部門が定かでない。

近代消息2b024。イセモノカタリ。古今戀哥2b026。後撰2b026。

卷第十五

摩訶止觀「脚踏降而嘉事」049。西宮記「凶服」060。



■資料影印・翻刻(単行書)

片桐洋一『中世古今集注釈書解題 1・2・3 上下・4・5・6』赤尾照文堂,1971・10〜1987・6

1 卷：「為家古今序抄」「三秘抄古今聞書」「明疑抄」

2 卷：「古今和歌集序聞書三流抄」「伝頓阿作古今序注」「弘安十年本古今集歌注」

- 3 卷：「六卷抄」「兩度聞書」
4 卷：「蓮心院殿説古今集注」
5 卷：「宮内庁書陵部本古今集抄」「古今和歌集灌頂口伝」「玉伝神秘卷」
佐佐木信綱・久曾神昇・編『日本歌学大系 4・8・9・別 4・別 5』、風間書房、1956・1～1981・11
4 卷：「玉伝集和歌最頂」「神秘九章」「阿古根浦口伝」
8 卷：「古今和歌集正義総論」
9 卷：「古今集正義総論補注」「古今集正義序注追考」「古今集正義総論補注論・同弁」
別 4 卷：「古今集序注」「古今集注」
別 5 卷：「頭注密勘抄」「僻案抄」

新井栄蔵・編『曼殊院蔵古今伝授資料 1～7』、汲古書院、1990・12～1992・6

- 1 卷：「古注上」「古今秘注鈔」
2 卷：「古今秘抄」「玉伝神秘卷」「古今灌頂卷」「和歌灌頂次第秘密抄」「和歌秘事并序」「古今秘聴抄」
3 卷：「古今集聞書(六卷抄)」
4 卷：「古今鈔」
5 卷：「古今集聞書(清書本)」「古今序聞書」
6 卷：「難波津泰訊抄」「或聞書中有所存抜書」
7 卷：「口伝」

竹岡正夫『古今和歌集全評釈 上・下』、右文書院、1976・11

古注を7種集成翻刻。清輔本『古今集』勘物、『教長』古今集注『頭注密勘』寂恵本『古今集』勘物

『兩度聞書』『榮雅抄』を翻刻。なお、『頭昭』古今集注』をして翻刻されるものは、『頭昭』古今集注』ではない。

片桐洋一『古今和歌集全評釈 上・中・下』、講談社、1998・2

古注釈の項目を立て、数種の古注釈を引用。

赤羽淑・解題『ノートルダム清心女子大学古典叢書 古今私秘聞』、ノートルダム清心女子大学古典叢書刊行会、1970・5

正宗家蔵『古今私秘聞』(兼載↓兼純)を翻刻。

『京都大学国語国文資料叢書 2 古今序注 曼殊院蔵』、臨川書店、1977・12

『京都大学国語国文資料叢書 19 古今集抄 京都大学蔵』、臨川書店、1980・4

『京都大学国語国文資料叢書 48 古今集註 京都大学蔵』、臨川書店、1984・11

『京都大学国語国文資料叢書 40 古今切紙集 宮内庁書陵部蔵』、臨川書店、1983・11

『天理図書館善本叢書和書之部 35 平安時代歌論集』、八木書店、1977・5

「僻案抄」

『天理図書館善本叢書和書之部 43 和歌物語古註集』、八木書店、1979・7

「古今集註」

『天理図書館善本叢書和書之部 58 和歌物語古註続集』、八木書店、1982・11

「古今問答」

『早稲田大学蔵資料影印叢書国書篇 7 中世歌書集』、早稲田大学出版部、1987・6

「三鈔」「古今集注」「古今相伝人数分量」「古今伝授書」「古今集注」「古今伝受書」

『早稲田大学蔵資料影印叢書国書篇 18 中世歌書集 2』、早稲田大学出版部、1989・12

「僻案集」「古今和歌集灌頂口伝」

『細川家永青文庫叢刊 9 歌論集』、汲古書院、1984・1

「三抄秘(古今集聞書・後撰集聞書・拾遺集聞書)」

『東京大学国語研究室資料叢書9 古今和歌集注抄出・古今和歌集聞書』汲古書院,1985・9
赤羽淑・解題』ノートルダム清心女子大学古典叢書2—14 古今和歌集聞書』福武書店,1978・7・9
秋永一枝・田辺佳代・編』古今集延五記 天理図書館蔵』笠間書院,1978・8

天理大学附属天理図書館蔵堯惠自筆『延五記』を翻刻。

久保田淳・解説』日本古典文学影印叢刊22 頭註密勘』日本古典文学会,1987・9

中央大学附属図書館蔵『頭註密勘』を影印。

徳江元正・編』古今和歌集三條抄』三弥井書店,1990・10

『東海大学蔵桃園文庫影印叢書10 六親』東海大学出版会,1992・7

白山芳太郎』神道大系論説編19』神道大系編纂会,1992・12

北畠親房注を翻刻。

『古今集古注釈大成 古今和歌余材抄・古今集註・古今秘註抄』日本図書センター,1978・12

片桐洋一・編』初雁文庫本 古今和歌集教端抄1〜5』,1979・7〜11

『北村季吟古註釈集成25 八代集抄1』,新典社,1979・4

『北村季吟古註釈集成26 八代集抄2』,新典社,1979・5

『北村季吟古註釈集成別2 古今集序抄』,新典社,1980・11

滝沢貞夫・編』古今和歌集正義 復刻版』勉誠社,1978・12

竹岡正夫・編』古今和歌集正義講稿』勉誠社,1984・9

耕雲聞書研究会』古今集古注釈書集成 耕雲聞書』笠間書院,1995・2

伝心抄研究会』古今集古注釈書集成 伝心抄』笠間書院,1996・2

田野慎二・山崎真克』冷泉持為注 古今抄(広島大学蔵)上・下』私家版,1996・5〜1997・3

片桐洋一』関西大学図書館影印叢書1 古今序聞書』関西大学出版部,1997・1

深津睦夫』古今集古注釈書集成 浄弁注 内閣文庫本古今和歌集注』笠間書院,1998・3

片桐洋一』毘沙門堂本古今集注』八木書店,1998・10

■研究書(単行書)

飯田季治』和歌秘傳鈔』大鏡閣,1922・5(諸版あり)

松田武夫』勅撰和歌集の研究』日本電報通信社,1944・11

片桐洋一』中世古今集注釈書解題1・2・3・4・5・6』赤尾照文堂,1971・10〜1987・6

横井金男』古今伝授の史的研究』臨川書店,1980・2

横井金男・新井栄蔵編』古今集の世界伝授と享受』世界思想社,1986・2

横井金男』歌学伝授史総論』

赤瀬知子』初期の古今集注釈と和歌の家の展開—院政期から鎌倉期—』

深津睦夫』宗匠家説とそれをめぐる注釈—南北朝期—』

武井和人』(混沌)の時代—室町前期—』

小高道子』東常縁から細川幽斎へ—室町後期Ⅰ・宗祇系—』

山本登朗』堯惠流古今説の方法と展開—室町後期Ⅱ—』

小高道子』細川幽斎から後西院へ—近世Ⅰ・堂上派(御所系)—』

日下幸男』地下一流の古今伝授—近世Ⅱ・堂上派(地下系)—』

三輪正胤』秘書の成立に関わる問題』

菅野洋一』歌学教育のカリキュラムとしての古今伝授』

新井栄蔵』古今伝授研究手引—まとめにかえて—』

武井和人』一条兼良の書誌的研究』桜楓社,1987・4

武井和人』中世和歌の文献学的研究』笠間書院,1989・7

- 片桐洋一『古今和歌集の研究』明治書院,1991・11
三輪正胤『歌学秘伝の研究』風間書房,1994・3
平安文学論究会・編『講座平安文学論究10』風間書房,1994・12
牧野和夫「注釈書の基層」
竹下豊「平安後期の万葉研究」
浅見緑「古今和歌集の享受における文保二年為定本」
小川豊生「くあやしの歌詠み>たちの空間」
山本登朗「義と心」
中哲裕「寛弘年間道長の道心と源氏物語」
加藤洋介「河内本本文の成立」
提康夫「道慶『湖月抄中ノ和歌集』に関する考察」
黒田彰「源平盛衰記難語考」
武井和人「何故書写者は奥書を記さなかったのか」
蔵中しのぶ「輪廻転生する王の子の物語」
近本謙介「談義注釈と物語」
海野圭介「平安文学研究・注釈史参考文献目録」
渡辺泰明・編『日本文学を読みかえる4 秘儀としての和歌―行為と場』有精堂,1995・11
宮川葉子『三条西実隆と古典学』風間書房,1995・12
西村加代子『平安後期歌学の研究』和泉書院,1997・9
綿拔豊昭『近世前期猪苗代家の研究』新典社,1998・04
日下幸男『近世古今伝授史の研究地下篇』新典社,1998・10
武井和人『中世古典学の文献学的研究』勉誠出版,1999・1
川上新一郎『六条藤家歌学の研究』汲古書院,1999・8
武井和人「室町後期に成立した古今集古注釈書の書誌的研究―宗祇流古注を中心に―」,平成10年度〜平成11年度科学研究費補助金(基盤研究)(C)研究成果報告書(課題番号10610418),2000・3
武井和人「一条兼良の書誌的研究 増訂版』おうふう,2000・11
平安文学論究会・編『講座平安文学論究15』風間書房,2001・2
佐藤明浩『和歌初学抄』物名「稲」の窓から」
浅田徹「近代秀歌と詠歌大概」
今井明「忘却と諳誦そして忘れ」
中村文「清輔の歌評態度」
武井和人「一条家歌学の薄暮」
海野圭介「後水尾院の古今伝授―寛文四年の伝授を中心に―」
中川博夫「中古」本歌取」言説史試論」
日比野浩信「藤原清輔の歌学書の古筆切について」
小林強「歌論・歌学書の古筆切について」
小山憲美「平安鎌倉期歌論参考文献目録」